

「備えあれば憂いなし」

新得町役場屈足支所長 中村 吉克

ダムの町で7つも発電所があるのに「新得、屈足はなぜ復旧が遅いんだ」との声も聞かれましたが、北電によると送電の幹線ルートエリアに入っている地域から復旧すること、屈足は入っていないとのことでした。いづれにしても、災害はいつどんな形で起きるか分かりませんね。9月23日には総合会館を避難所にして、指定された町内会を対象に水害を想定して避難訓練が行われ10人の方が参加しました。災害が起きた時、マニュアルどおりに行かない事もあります。訓練を通していざという時に備えて心がけが大事ですね。

備えあれば憂いなしという言葉が大事です。7日の大雪まつり、14日の軽トラ市まつりとあります。災害が起きた時に備えを忘れず、楽しみましょう。



「備えあれば憂いなし」

新得町役場屈足支所長 中村 吉克



9月6日早朝の胆振東部地震により北海道中が停電(ブラックアウト)となり、屈足も6日朝から7日深夜までほぼ2日間電気がない生活となりましたが、みなさん大丈夫でしたか。停電のため支所の業務はストップ、本庁との連絡もままならず、外からの情報はラジオと携帯電話だけで今の社会がいかに電気に頼っていたかをまざまざと見せつけられた2日間でした。支所では2年前の大震災後に導入した発電機で明りをとり、自主避難所を開設しました。

また、多くの方が携帯電話の充電に訪れSNS社会を垣間見た感じでした。そんな中、地域の方から延長コードやローソク、スイカ等などの提供を受け助け合いの精神に感謝でした。今回は幸いにも暖かな日でしたが真冬に同じ様な事が起きたらと思うとゾッとしました。

始めてみませんか? 「書き写し学習」卓上四季ノート

「卓上四季ノート」とは? 北海道新聞の1面に掲載されているコラム「卓上四季」を書き写すノートです。分からない言葉や漢字、天気や気になるニュースも記入できます



- 卓上四季ノートの効果
- ☆認知症予防のトレーニングに
 - ☆漢字や言葉を思い出せます
 - ☆毎日の社会情勢や出来事がわかる
 - ☆文章を読み取る能力が身に付く
- 1冊162円(税込) ※1冊で約1ヶ月使用できます。
ご希望の方はお気軽に販売所までお電話ください。

本

無送料

当販売所では様々なジャンルの書籍、雑誌、文庫、新書、週刊誌の定期購読など、ほとんど全ての出版物を確実にお取り寄せします。

今読みたい話題作! 欲しい本をお取り寄せ!

※当店取り置きとなりません。宅配サービスは致しません。

「義援金詐欺」に注意!



鈴木進司 巡査部長

胆振東部大地震の災害に伴う詐欺の発生に注意! 過去の震災時に見受けられた主な事例は、役所職員を装い家庭訪問し、募金を求めた。息子を煽り「職場で集めた義援金をなくしたのでお金を準備してほしい」。公的機関と紛らわしい機関名を煽り「避難地確保のため寄付して下さい」。

被災者を装いネット掲示板に「高経費を支援してほしい」と書き込み支援を求めた。実在する団体の名称を煽り「災害支援募金への寄付をお願いします」というファックスを送付し、実在団体とは別の個人名の口座に振り込ませようとした。「仮設住宅に入っている人を老人ホームに入れたので名義を貸してほしい」といって承諾した上、後日「名義貸しは犯罪」といって解決金を求めた等が発生しています。

公的な機関・団体は電話や訪問はしない。振込先(口座番号、名義)は、テレビ・新聞・ラジオ等で確認し警戒下さい。少しでも不審に思うようなことがあれば警察に相談下さい。



道新九月号
ポケットブック
の御案内です。



▼ポケットブック9月号
手間を省けず美味しくおいしい「麵つゆレシピ」
料理の味付けに困ったら「とりあえず麵つゆ」がお勧め。
しょうゆや砂糖、だしなどが入っていて基本となる味が出来上がっているから、麺料理はもちろん煮物や丼物などの味付けも簡単です。
今号では手間を省けずおいしく仕上がる麵つゆレシピを紹介しています。配布済み。

ポケットブック次号予告
優秀な伝統食品『のり』レシピです。
お楽しみに。

ねっとわーく屈足

ねっとわーく屈足電子版
ミニコミ紙「ねっとわーく屈足」が、パソコンやスマートフォンで動画も閲覧できます。
ツイッターも屈足の話一杯毎日更新!

じじ-akira1942

電池のきれた兜虫

赤池 武臣

この兜虫は一週間前、酔った店の客が、ふざけながら、典子のスカートの中に押し込んだのを、いつたんは怒って投げ捨てたのだったが、思いなおして拾い、いつも持ち歩くバッグの中にしまい、その夜、武彦に土産だといって渡したものであった。

はじめて見る兜虫に、思いのほか喜んだ武彦は、リング箱にほかの玩具と一緒に入れ、出せばいつもひとりで動きだす兜虫を、その夜以来どの玩具より大切に、いつも遊んでいた。典子は、はじめて武彦の内面をみた思いがした。と同時に、造り物ばかりが罷り通る、東京という街のむなしさを、いやというほど感じた。

もしこの事件がなかったら、悩みながらもこの街から逃げだす心のふんぎりは、多分つかないまま、ずるずると東京の巨大な洞穴の中に身をゆだね、枯れていったらどうだろう。

翌朝、典子は兜虫の一件を電話で舌のおかみにつぶさに話し、もうこれ以上、東京には住みたくないことを涙ながらに話した。

話の一部始終を聞き終わったおかみも、さすがに驚いた様子で、言葉を吞んでいたが、やがて、似たような事件が、この東京ではいつも起こっているのだと語り、自分の子も、父親が掴まえた蛙を見て、男の子のくせに泣きわめいたことをつづけてくれた。そして、これからの長い人生を思えば、これも一つの転機だろうと快く承諾してくれたのだった。

典子はその日のうちに古物商を呼び、一切の家財道具を売り払った。

この十年余りで、多少の蓄えもあった。つつましくやってゆけば、当分、生活に困ることはない。十二時発の夜行列車は乗客も少なく、ひっそりとしていて、典子と武彦の新しい旅立ちには、何もかもがふさわしかった。

生まれてはじめて乗る汽車に、最初は少しおどおどしていた武彦も、時間が経つにつれ、その雰囲気にも慣れてくると、いかにも楽しそうに、激しく通り過ぎてゆく街あかりを窓越しに眺めながら、床にとどかない足を小刻みにゆすっていた。

こんなに生き生きとした武彦の姿をかつて典子は見たこと。